歌舞伎といえば、京・大阪・江戸の大歌舞伎か、農村などで行われる素人の地芝居、農村歌舞伎をまず考えるが、そのいずれでもない「地方歌舞伎」とでも呼ぶべきものがあった――。

江戸時代の中ごろ、中央から農村へ歌舞伎が浸透しはじめた。農民自身が芝居をしたり、役者を招いて芝居を楽しむために村々に“農村舞台”がつくられたりした。

この農村舞台で芝居をしていた役者で、とくに播州地方に住む人たちやその人たちの座（劇団）を“播州歌舞伎”と呼ぶ。播州歌舞伎は、余技に演ずるのではなく職業集団として巡業し、都会の大歌舞伎や小芝居とも違った独自の演技演出・外題を伝えてきた。

現在、10～30歳代の女性を中心とした地元の若者たちが先人の願いと伝統を引き継ぎ、「播州歌舞伎」の新しい時代を築いている。

平成26年9月15日（月）　於：ベルディーホール

外題：「一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）　熊谷陣屋の段（くまがいじんやだん）」

一谷嫩軍記　熊谷陣屋の段

～ あ ら す じ ～

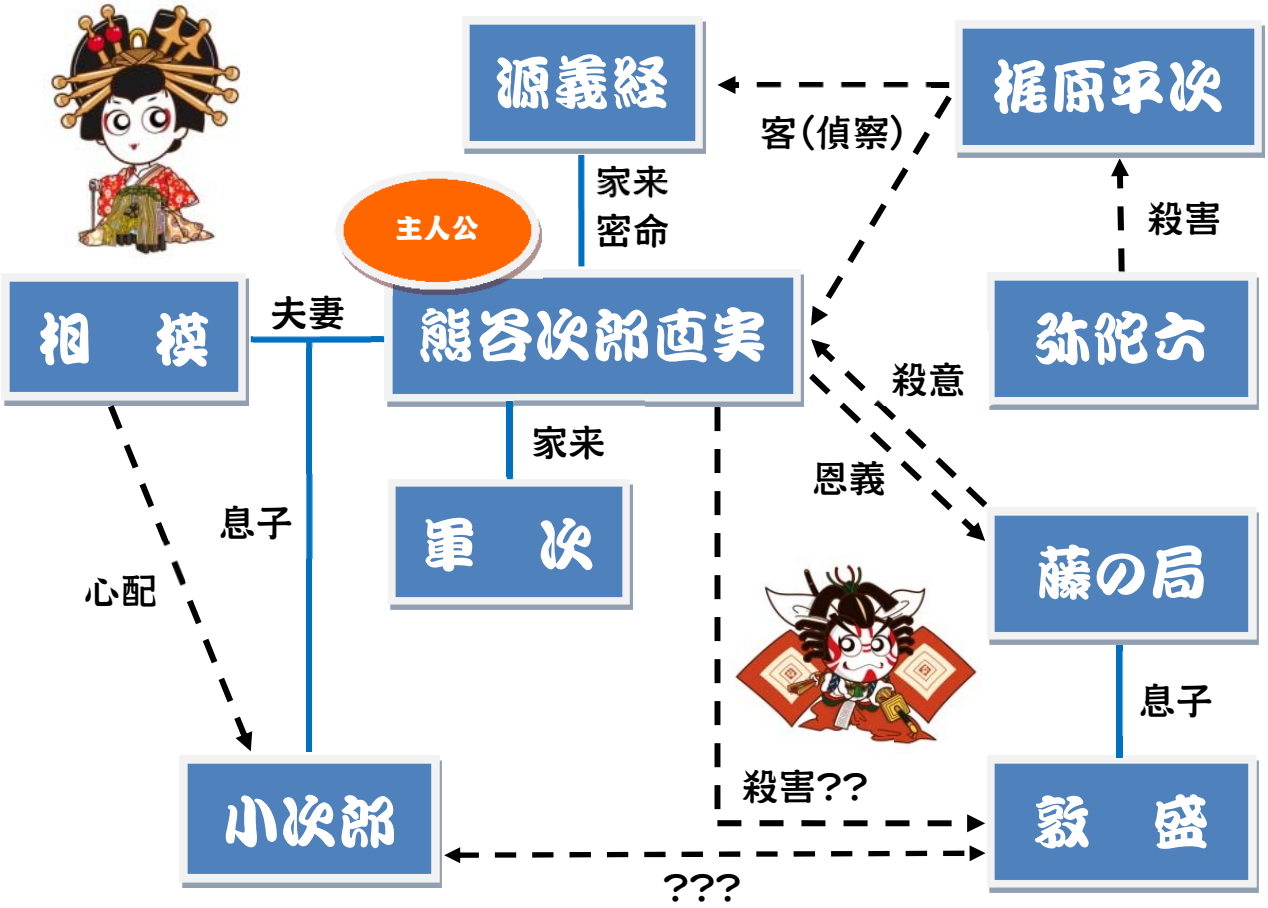
時は寿永三年(１１８４)二月半ば、舞台は熊谷直実の陣屋。妻の相模が遅い夫の帰りを軍次と待っているところから始まります。相模は息子・小次郎の身を案じて、はるばるやって来たものの、夫に叱られないかと、不安な様子。

奥では、頼朝の密使・梶原平次景高が、御影の石屋（弥陀六）を引き連れてきて、なにやら詮議をしようと待ちかまえています。そこへ熊谷が帰ってきて、相模に小次郎のことを話すうちに、敦盛を討ちとったことを告げます。それを聞いた藤の局が、悲憤のあまり飛び出してきて「わが子の仇」と、熊谷に斬りかかります。けれども、敦盛の首級（しるし）として首実検に供されたのは、なんと小次郎の首でした。驚愕する相模と藤の方を「一枝を伐(き)らば一指を剪(き)るべし」と記された制札で押さえる熊谷に、敦盛を助けよとの内意を熊谷が見事に察知し遂行したを知った義経は「よくも討った。敦盛の首に相違ない。この首にゆかりの人もありつらん。見せて名残を惜しませよ」と声をかけます。ここで浄瑠璃<あいとばかりに女房は、あへなき首を手に取り上げ見るも、涙にふさがりて、かわる我が子の死顔に、胸はせき上げ身もふるはれ、持ったる首のゆるぐのを、うなづく様に思はれて・・・>の名調子が入り、悲しみに狂う相模に誰しも思わずもらい泣きをしてしまいます。

このとき、奥で様子を窺っていた梶原平次景高が「聞いた、聞いた。義経、熊谷心を合せ、敦盛を助けし段々、いざこのことを鎌倉公に注進せん」と言って登場しますが、弥陀六に殺されてしまいます。この謎めいた石屋の弥陀六、実は平弥平宗清に託された鎧びつに敦盛が入れられているのを見届けると、熊谷は義経に暇をもらい、名を蓮生と改め、相模を伴って西方弥陀の国へと旅立つのでした。一方、藤の方も弥陀六について行き、無情の風にさらされる中で幕となります。

合戦の様子を聞かせる熊谷の語り、二人の女性を押さえる「制札の見得」、迫真の「首実検」の場、出家して思わず口にする「十六年は一昔」の述懐など、数々の名場面を中央公民館播州歌舞伎クラブの若者が渾身の力を込めて演じています。

登場人物関係図



配　役

くまがいじろうなおざね 熊谷次郎直実	(桑原　志帆)	太鼓	(田中　朱音)
みなもとくろうほうがんよしつね 源九郎判官義経	(山下　新吾)	狂言	(橋間　美穂)
びゃくごう　みだろく 白毫の弥陀六	(松井　梨花)	黒子	(笹倉　佳奈絵)
ふじ　つぼね 藤の局	(田中　悠菜)	黒子	(神澤　玲花)
さが　み 相　模	(山根　加織)	口上・黒子	(中村　佳奈)
つつみ　ぐんじ 堤の軍次	(笹倉　恵美)	監修	(中村　和歌若)
かじわらへいじかげたか 梶原平次景高	(井上　文夫)		

播州歌舞伎の見どころ！！

『平家物語』では、一の谷の合戦で弱冠十六歳の平家の若武者敦盛を打ちとった熊谷直実が、世の無情を感じ、武士を捨て僧となったという内容の話ですが、歌舞伎の上では、藤の局の子敦盛が殺されたのか、はたまた熊谷と相模の子小次郎が敦盛の替え玉として殺されたのか、熊谷と相模、藤の局の３者の涙あふれる駆け引きが見どころとなります。

また、相模が息子の死を知り泣き崩れる場面や、梶原平次景高が弥陀六に殺される場面などに、播州歌舞伎特有のしつこさや泥臭さを垣間見ることができ、最後の決めの場面、義経を筆頭に登場人物が勢ぞろいする絵は圧巻です。

１０代～３０代の女性を中心とした「なでしこ歌舞伎」とも言うべき、全国的にも珍しい歌舞伎。その演技に光る艶やかさやきめ細やかさ、男性顔負けの迫力ある演技にご注目いただき、最後までごゆっくりとお楽しみください。

播州歌舞伎クラブ 20周年記念公演のお知らせ

多可町を代表する播州歌舞伎を継承しようとしているのは、なんと10代～30代の女性が中心の多可町中央公民館播州歌舞伎クラブのメンバーです。伝統芸能のイメージからはかけ離れた、現代の若き女性たちが、練習に、公演活動にとがんばっています。

多可町播州歌舞伎クラブは今年で20周年を迎えます。いつもの公演にさまざまな企画を加え、皆様に歌舞伎の楽しさを伝えられる公演にしようと、計画を進めています。ぜひ、お誘いあわせの上、ご参加下さい。

とき：平成27年1月18日（日）　ところ：ベルディーホール

内容：中町北小学校歌舞伎クラブ、三味線クラブなど「寿式三番叟（ことぶきしきさんばそう）」

播州歌舞伎クラブ「玉藻前（たまものまえ） 旭（あさひ） 袂（たもと） 三（さん）の切（き）り～道春（みちはる） 館（やかた）の段～」14 年ぶりの復活!!

＜お問い合わせ＞
多可町教育委員会　こども未来課　　担当：浦川・森脇・荻野
ＴＥＬ　３２－２３８５　ＦＡＸ　３２-４１４２

歌舞伎といえば、京・大阪・江戸の大歌舞伎か、農村などで行われる素人の地芝居、農村歌舞伎をまず考えるが、そのいずれでもない「地方歌舞伎」とでも呼ぶべきものがあった――。

江戸時代の中ごろ、中央から農村へ歌舞伎が浸透しはじめた。農民自身が芝居をしたり、役者を招いて芝居を楽しむために村々に“農村舞台”がつくられたりした。

この農村舞台で芝居をしていた役者で、とくに播州地方に住む人たちやその人たちの座（劇団）を“播州歌舞伎”と呼ぶ。播州歌舞伎は、余技に演ずるのではなく職業集団として巡業し、都会の大歌舞伎や小芝居とも違った独自の演技演出・外題を伝えてきた。

現在、10～30歳代の女性を中心とした地元の若者たちが先人の願いと伝統を引き継ぎ、「播州歌舞伎」の新しい時代を築いている。

平成26年10月5日（日）　於:加東市森住吉神社

外題:「義経千本桜四段目～吉野山道行きの場～」

義経千本桜～吉野山道行の段～

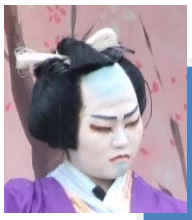
～あらすじ～

舞台は桜が満開の吉野山。この山にかくれている義経を追ってきた静御前が鼓を持って舞っているところへ忠信が登場します。この忠信は実は狐で、親狐の皮が張られた静御前の鼓を親と思い、ずっと付いて来ていたのでした。

そのうちに、コミカルな化粧をした早見の藤太が家来を引き連れて現れます。藤太は静御前をつかまえて一儲けしようとたくらんでいるのですが、どうしようもない臆病者で、家来に馬鹿にされている始末。家来とのかけ合いや藤太の道化が面白く、思わず笑いを誘われます。

藤太たちが静御前を見つけて喜んでいると、いつの間にか忠信にすり替わられ、立ち回りをしているうちに、だんだん狐の魔力にとりつかれていきます。そして藤太たちを完全に打ち負かした忠信が、堂々と六法を踏んで幕となります。

登場人物関係図



義経の忠臣

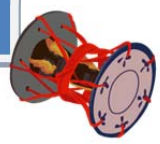
さとうただのぶ
佐藤忠信
（山根　加織）

守る

義経の思い者

しずかごぜん
静御前
（橋間　美穂）

義経を追って吉野へ



おくびょう
臆病

捕まえよう

はやみ　とうた
早見の藤太
（松井　梨花）

こうじょう　くろこ
口上・黒子
（田中　悠菜）

馬鹿にする

家来

けらい
家来
（神澤　玲花）

けらい
家来
（中村　佳奈）

けらい
家来
（田中　朱音）

けらい
家来
（常見　妃菜）

配　役

さとうただのぶ 佐藤忠信	（山根　加織）	太鼓	（桑原　志帆）
はやみ　とうた 早見の藤太	（松井　梨花）	狂言	（笹倉　恵美）
しずかごぜん 静御前	（橋間　美穂）	黒子	（笹倉　佳奈絵）
家来	（神澤　玲花）	口上・黒子	（田中　悠菜）
家来	（中村　佳奈）	監修	（中村　和歌若）
家来	（田中　朱音）		
家来	（常見　妃菜）		

播州歌舞伎のここがおもしろい!!

播州歌舞伎は東京や大阪の大歌舞伎や、全国各地の農村歌舞伎とはちょっと違います。見る人に喜んでもらうためのいろんな工夫があるのです。例えば芝居の中で刀で切られても簡単には死にません。見る人が「ようやった」というまでは何度も立ちあがります。播州歌舞伎のおもしろさは、

① 身振り手振りが大げさ
② 化粧や衣装がハデ
③ 身の回りのいろんなものを道具に使う

見る人も芝居に参加しているような気分だったでしょうね。

播州歌舞伎クラブ 20周年記念公演のお知らせ

多可町を代表する播州歌舞伎を継承しようとしているのは、なんと10代～30代の女性が中心の多可町中央公民館播州歌舞伎クラブのメンバーです。伝統芸能のイメージからはかけ離れた、現代の若き女性たちが、練習に、公演活動にとがんばっています。

多可町播州歌舞伎クラブは今年で20周年を迎えます。いつもの公演にさまざまな企画を加え、皆様に歌舞伎の楽しさを伝えられる公演にしようと、計画を進めています。ぜひ、お誘いあわせの上、お越し下さい。

とき：平成27年1月18日（日）　ところ：ベルディーホール

内容：中町北小学校歌舞伎クラブ、三味線クラブなど「寿式三番叟（ことぶきしきさんばそう）」

播州歌舞伎クラブ「玉藻前旭袂三（たまものまえあさひのたもとさん）の切（き）り～道春館（みちはるやかた）の段～」14 年ぶりの復活!!

＜お問い合わせ＞
多可町教育委員会　こども未来課　　担当：浦川・森脇・荻野
ＴＥＬ　３２－２３８５　ＦＡＸ　３２-４１４２

多可町中央公民館

播州歌舞伎クラブ

家島公演

10月19日（日）

真浦区民会館にて午後二時 開演

外題

一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）　熊谷陣屋の段（くまがいじんやだん）

オイ

歌舞伎といえば、京・大阪・江戸の大歌舞伎か、農村などで行われる素人の地芝居、農村歌舞伎をまず考えるが、そのいずれでもない「地方歌舞伎」とでも呼ぶべきものがあった――。

江戸時代の中ごろ、農民自身が芝居をしたり、役者を招いて芝居を楽しむために村々に“農村舞台”がつくられたりした。この農村舞台で芝居をしていた役者で、とくに播州地方に住む人たちやその人たちの座（劇団）を“播州歌舞伎”と呼ぶ。播州歌舞伎は、余技に演ずるのではなく職業集団として巡業し、都会の大歌舞伎や小芝居とも違った独自の演技演出・外題を伝えてきた。

現在、10～30歳代の女性を中心とした地元の若者たちが先人の願いと伝統を引き継ぎ、「播州歌舞伎」の新しい時代を築いている。